

氏名(本籍) **鍋島 稲子 (東京都)**

学位の種類 博士(芸術学)

学位記番号 博甲第1,748号

学位授与年月日 平成9年3月24日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

審査研究科 芸術学研究科

学位論文題目 明治書道の展開と中林梧竹
—北派の書の移入をめぐる—

主査 筑波大学教授 角井 博

副査 筑波大学教授 伊藤 鈞

副査 筑波大学教授 文学博士 相馬 隆

副査 東京家政学院大学教授 芸術学博士 眞保 亨

論文の内容の要旨

本論文は、現代芸術としての書を育む母胎となった明治時代における書の展開を考察するものであるが、とりわけ佐賀鍋島藩の生んだ明治期の書家、中林梧竹(1827～1913)に焦点をあて、彼の学書の形態や中年期における清国への留学・修業の模様、学書対象であった北魏の鄭道昭との関連を基にその書の形成を精査・分析し、梧竹芸術の中での北派書法の意義を考察するとともに、明治書壇における梧竹の北派移入の割合と業績を賞揚したものである。

本文は全体を七部分に分け、序説において本研究の目的・意義などを説き、以下、第一章日本書道にみる中国書法の受容と展開、第二章日本近代書道のあけぼの、第三章中林梧竹の人と書、第四章明治の書壇及び書人の活動、第五章明治書道界と中林梧竹、と題して論述を展開し、最後に梧竹芸術・明治書道の特質を整理し、純然たる職業書家の成立や近代書道の夜明けを示唆しつつ結語としている。各章の論旨・構成は下記の通りである。

第一章日本書道にみる中国書法の受容と展開は、わが日本書道の歴史を概観したものであるが、本論文の主題となる中国書法の影響という観点から、第一節日本書道の黎明、第二節上代における大陸書法と和様書道の成立、第三節中世における和様流派の乱立と唐様書道の展開、第四節桃山・江戸期における和様と唐様、の四期に大別し、日本書道に及ぼした中国書法の影響を再確認している。わが国の書の歴史は、文字の伝来という原点から中国大陸の影響下にあり、以来、中国・朝鮮との政治・文化の交流によって絶えず刺激を受けながら、わが国の気候・風土・国民性や習慣の違いによって中国とは異なる独自の書風を形成・確立するという過程を幾度となく繰り返してきたのである。本章での論及は、その最後の大きな波が明治期であることを主張する意味において意義がある。

第二章日本近代書道のあけぼのは、数々の伝統を受けながら幕末から明治にかけて新しい書道が成立するまでの経緯を鳥瞰するもので、三節からなる。先ず第一節で、黎明期である幕末から明治初期、啓蒙期の明治十年代、それ以後の確立期と、各時期の特徴をとらえながら活動の模様を概説し、第二節で、清時代における碑学と北派の活動を紹介するとともに、楊守敬の来日や渡清作家による明治期における清朝碑学べき志向のあらましを述べ、続く第三節で、特に北派書法流入の過程を論述している。近代芸術としての明治書道が出現するのは明治十年以降のことであるが、その背景に、清朝における書学の動向、とりわけ碑学から北派の書へという展開とその様式が渡来・渡清という両国人の活動によりもたらされ、わが国の書が革新的な変貌を遂げた事実を力説している。

第三章中林梧竹の人と書は、明治期における北派の移入あるいは摂取にあたって先駆者の一人と思われる中林梧竹について、彼の生涯と書業を闡明にしたものである。まず第一節では、梧竹の生涯を書風の変遷という観点から四期に分けて展望しているが、編年的に区分した梧竹の作品及び作風については、筆者がここ数年来各地を奔走して収集した新資料を盛り込んだ記述であり、注目に値する考察となっている。第二節では梧竹が北派に傾倒した第二期をさらに長崎・清国・東京という在住期間にわけて詳しく分析し、とりわけ学書のみを目的とする清国での留学ぶり、潘存との師弟関係、金石関係の文献・文物の収集、請来品目録と研究・制作との関係に及ぶ考察を加え、北派の習得が梧竹晩年期の洗練された書表現の因をなしていると説示している。

第四章は明治の書壇及び書人の活動を、梧竹と同時代の書家と作品を北派の書との関わりにおいて考察したものである。まず第一節で明治期における北派受容の社会的背景を想察し、第二節において明治書道界を代表する日下部鳴鶴・巖谷一六・北方心泉・西川春洞・副島種臣の北派書法への取り組み方や書業を精査し、そうした検討を基に続く第三・四節において、北派移入による明治書壇に及ぼした影響や役割、そして明治様式の展開や多彩な変化について論を進めている。

第五章明治書道界と中林梧竹は、梧竹における北派書法受容の特異性を見出す意味において、第四章において考察した同時代の書家による北派書法を比較し、梧竹の明治書道の展開に果たした役割に対して一定の評価を下し、明治書道史に関与した功績について総合的に解釈を加えたものである。まず第一節において、梧竹が主として鄭道昭一つの理想としながらも主観的な感性を加味し、篆意や隸意を含んだ異体字を多く使い、時にはそれが破格的な奇怪さを伴うユニークな表現となることを強調し、北派を超越して自由に独自のスタイルを形成しながら、なお北派の骨法を失っていない特異性を謳いあげている。また第二節では明治書壇における北派様式の諸相、その中での中林梧竹の才能と熱意・情趣とが生み出した独創性の強い書表現の位相について自論を展開している。

最後の結語は如上の論述を基に、中林梧竹の北派導入の意義に思いを致しながら、彼の書芸術及び明治書道の特質を整備したものである。すなわち、北派の書は明治書壇に受け入れられ、日本人の情趣豊かな伝統書道に鋭く骨法的な歯切れのよさと自由で束縛のない素朴さが加わって、さまざまな新しい表現を展開させていったが、何よりも書に対する美意識に変化をもたらしたことに大きな意義があるとしている。たしかに中林梧竹は特異な表現形態をもって特記されるが、もう一つ、書のみの世界に生き抜いた人物、すなわち独立した書家であり芸術家としての活躍ぶりにも目を向ける必要がある。明治書壇に活をいれた北派書法導入の役割は大きいですが、それと同時に、北派書法の迫真的再現に固執したのではなく、そこから受け取る潜在的な美を自己の個性のままに投影し、束縛のない庶民的な芸術として完成させたところに大きな意義がある。中国や日本のこれまでの書道は高位高官や学者の書業であったが、梧竹のような自由な庶民における職業書家の成立、そして近代芸術としての書道がスタートし、今日に及んでいることは他の芸術にも見られる現象であり、その意味においても梧竹の書道界に残した功績は再評価されて然るべきものである、と締め括っている。

なお巻末に、「中林梧竹作品目録」・「中林梧竹略年譜」及び参考文献を付記し、また別冊に、これまでに渉猟した梧竹作品を編年的に収載する「図版資料」を添えている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、中林梧竹の学書を起点にして彼の書芸術の形成と特質、さらには明治書道の活動の中での役割と業績、さらにはその後への影響を詳細に論述したものである。

明治時代の書は幕末以来の唐様・和様という二派の流れを継承し、一般には明治13年(1880)に、駐日公使何如章(1838~1891)の随員、楊守敬(1839~1915)がもたらした六朝書の碑版法帖類により大きな変革期を迎えたと言われている。しかし実際には、これに先立つこと2年前、すなわち明治11年(1878)に、中林梧竹が長崎

領事館の官吏余元眉に認められ、四年間にわたって碑学を学んだり多くの碑法帖を贈られたり、さらに二度にわたって学書のみを目的とした清国留学を果たして新風を創始しており、その先鞭をつけていたことを説くものは極めて少ない。それは、同時代の日下部鳴鶴や巖谷一六らが東京において高級官吏として、また書家として活躍していたのに対し、梧竹が九州の片田舎において一介の孤高の書人として活動したに過ぎなかったからである。このため、中林梧竹はさほど高い評価を博していなかったが、梧竹の明治書道史への功績は大なるものがあり、再評価されて然るべきものである、と著者は結論付けている。

歴史と伝統を誇る書道史のなかにあって、明治の書を主題にすることはあまりにも卑近であり、テーマとしても軽きにすぎる感を免れ難い印象がある。しかしこうした偏見ゆえに、上辺だけの現象が鸚鵡返しの口述・記述されるだけで、たかだか百年前のことでありながら明治の書の実態はベールに包まれた感があり、各地に潜在する資料も等閑にされている状況にあった。今日における書道の隆盛は、明治期における革新的な書道への摸索が強い基盤となっている。また大正・昭和期における学書の主流が碑学になっていることも、明治における北派移入の影響を被っていることは誰も認めるところである。近代芸術から現代芸術への橋渡しを果たした明治書道の役割の重要さを思うとき、当時活躍した作家の子孫や弟子たちの存在があり、さまざまな資料の現存する今、こうしたことを確実に整備し、考証を重ねておくことは意義深いことといえよう。こうした理念のもとに敢えて明治期の一書人をとらえ、しかも単なる作家論の域を脱却して、新たな展開を期待される現代書道への大きな基盤を築き上げたと言ふところに本論文の意義と独創性がある。

著者は永年にわたり梧竹の書作品を渉獵し、精査にあたってきたが、幸い小城鍋島藩の末裔という出自を利し、郷里に散在する遺品を普く調査し、今まで公刊されたことのない新資料を豊富に盛り込んでいる点、まず注目に値する。また、潘存を始めとする中国人と梧竹との関連資料、及び梧竹の学書の裏付けとなる資料の収集も多種多彩なものがあり、手間隙かけて自らの足で集めた努力と行動力を感じさせるものがある。しかし著者自らが述べているように、日本国内にはまだまだ梧竹作品の存在が噂されているし、近年にいたり「梧竹学会」も誕生している。今後は原件の調査という面でもさらに機会を設け、また学会員相互の情報交換を密にし、独断にすぎない論考と批判されぬようより一層の精進・研究を期待するものである。

本論文は、言はば中林梧竹の復権をめざしながら、これまでの概念的な梧竹論とはまったく異なる角度と切り口とによって、従来謳われていた以上の高い評価を与え、さらにまた梧竹研究と北派書法の研究を総合することによって、明治期における北派の移入に伴う近代書道の成立と展開の諸相について闡明にしたものである。その内容・構成はともに水準に達しているものと思われ、鋭く精力的に解明した労作として、また方法論的にも独自性の高い論文として高く評価することができよう。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。